第十二講　随筆の読解③

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1　レナード・バーンスタインがオーケストラに向かって、ブラームスの「交響曲第一番」の指揮を始めた。弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器が全体で演奏する印象的な序章。ところが、指揮者はまもなく両腕をダランと下ろして指揮することをやめた。それでもオーケストラは、何事もなかったかのように続けて演奏している。CBSのテレビドキュメンタリーとしてバーンスタインが企画、出演した番組の一シーンだ。バーンスタインはテレビの向こうの視聴者に、こう問いかけている。「指揮者って何のためにいるの?」と。後年、バーンスタインの遺志を継いで子どもたちのためのオリジナルコンサート「佐渡裕ヤング・ピープルズ・コンサート」を企画した僕は、指揮台の上に寝転がって、ちょっとオーバーに①これをやってみた。やっぱりオーケストラは何食わぬ顔で演奏を続ける。指揮者とは何のためにいるのだろう。指揮台の上で何をやっているのか。

2　指揮者と聞いて、みんなが真っ先に思い浮かべるイメージは、ステージでオーケストラに向かって指揮棒を振っている姿だろう。〔Ａ〕、指揮者の仕事のほとんどは、指揮台に立つ以前にある。まず楽譜。リハーサルで指揮者が自分のイメージする音楽をオーケストラに伝えるとき、指揮者と演奏者の共通言語になるのが楽譜だ。楽譜は演奏者とのコミュニケーションを図る最大の手段となる。指揮者はオーケストラの中で唯一、音を鳴らさない音楽家だ。そんな指揮者の指揮に応えて、奏者が弓を動かしたり、息を送ったり、ものを叩いたり、声を出したりする。それによって空気が振動して、人の鼓膜を震わせ、人の心を揺るがせる。感動が生まれる。〔Ｂ〕音楽は、言ってみれば、記号でしかない楽譜を、具体的な空気の振動に変えることで、人々に感動を与えることができる芸術である。(中略)

3　楽譜は建築でいえば設計図のようなものだ。優れた作曲家は、具体的な建物がどんな天候の中で、どんな場所に建ち、どういう人た

ちが、何を目的にその建物を使うのか。そういうところまで考えて、楽譜という設計図に自分の音のイメージを表現している。指揮者はその設計図を見て、作曲家のつくり上げた建築物を想像し、それを建てるためにどういう職人（演奏者）と、どういう材料（音）が必要で、どの職人と職人がどういうふうに力を合わせれば、優れた建築物が建てられるかを考える。考えてみれば、不思議なことだ。見知らぬ土地で、しかも二百年も三百年も前につくられた作品が、同じ譜面を手にしさえすれば、現代のドイツでも日本でも同じ演奏ができるのだから。指揮者は、楽譜という記号を使っていったん冷凍保存された音楽を、生き生きと再現しようと、全身全霊で想像を巡らせる。作曲家はその音の風景に何を求めたのか。最も単純な和音に人間の生命力を見出（いだ）したのか。あるいは異なる調性の重なりに現代社会の混沌（こんとん）を表そうとしたのか。そこからは推理ゲームのように、その作曲家特有の感覚とイメージから音楽に込めたメッセージを探り当てていくのである。

4　［C］、プッチーニのオペラ「蝶々（ちょうちょう）夫人」。この作品を僕は、芸術監督を務める兵庫県立芸術文化センターで、二〇〇六年に上演した。「蝶々夫人」は、長崎を舞台に没落士族の娘である蝶々夫人とアメリカ海軍士官ピンカートン中尉との悲恋を描いている。普通のオペラの場合、舞台の最後に鳴る和音は明るい音にしても暗い音にしても「解決する」音が使われる。つまり、不協和音が協和音になるなど緊張が解ける音に移行するわけだ。しかし、「蝶々夫人」は②「解決しない」音で終わる。それは何を意味しているのだろうか。悲劇として幕を閉じるこのオペラをどんな音で始め、どんな音で終えるかをプッチーニは深く考えたに違いない。ラストの音は解決しないだけではなく、オペラ冒頭の音にまた戻っていく。まるでこの話が永遠に繰り返されるように。この音のつくり方は、物語が、ある特定の時代、日本とアメリカの間だけで起こった悲劇ではなく、いつの時代、どの国でも繰り返されてきたし、これからも繰り返されていくことを暗示しているようにも思える。（中略）

5　譜面をより深く理解するためには、曲が生まれた時代背景を研究し、作曲家が過ごした場所に身を置いて、③気候や風土を肌で感じることも試みる。一年の半分以上を海外で過ごしてきた僕にとって、日本にいたときには知らなかった音、ヨーロッパで初めて知った音がたくさんある。音だけではない。ヨーロッパに行って、僕が得たいちばん大きな発見は光だった。多くの作曲家を生んだヨーロッパに暮らして感じるのは、何ともいえない冬の暗さだ。十一月から三月までは日照時間が短く、毎日、曇り空で日が差さない日が続く。パリですら年によっては、ひと月の三週間が雨のときもある。

[6] どんよりした寒空の下で春の日差しを待ちわびる生活をしてみると、たとえば「春」と名付けられたシューマンの「交響曲第一番」が、実は春につくられたのではないことが身をもってわかる。「春の始まり」という標題が与えられた「第一番」の第一楽章は、冒頭の金管楽器が春を呼び覚ますように響き、あたり一面が緑色を帯びてきて、蝶が舞う様子が暗示される。主部のアレグロでは、すべてが春めいてくることを示しているようだ。しかし、シューマンはこうした情景を目にして、この曲を書いたわけではない。メンデルスゾーンに宛てた手紙には、春めいた情景は作品完成後に浮かんだイメージだと記している。実際、この作品が書かれたのは一月から二月にかけての短い期間、まだ暗い空の下で春の光を待ちわびているころだった。（中略）

[7] ヨーロッパにたくさんある噴水。あれも日差しがなければキラキラとは光って見えない。つまり、北ヨーロッパでは噴水は「水の芸術」というよりも、実は「光の芸術」なのではないだろうか。そんな感覚を研ぎ澄ましていくと、見慣れた譜面に並ぶ音符の一つひとつが、実は光を表現していることがわかるようになる。「もっとキラキラとまぶしい音を出してほしい」「雲間から日の光が差すように」オーケストラにそんな指示を出すことも少なくない。光、温度、湿度、匂い、そしてそれらが生み出す静けさ……曲が生まれた土地の気候や風土は、すべて音に深くつながってくる。感覚を鋭敏にして作曲家と同じ場に身を置くことは、そのつながりを体感することになる。

（佐渡（さど）　裕（ゆたか）「棒を振る人生　指揮者は時間を彫刻する」より）

（注）○[1]～[7]は段落符号である。
○レナード・バーンスタイン＝アメリカの指揮者・作曲家。
○ブラームス＝ドイツの作曲家。
○ＣＢＳ＝アメリカの放送会社。
○ドキュメンタリー＝事実に基づいて制作された番組。
○調性＝音のまとまり。
○混沌（こんとん）＝入り混じってなりゆきが分からない様子。
○プッチーニ＝イタリアの歌劇（オペラ）作曲家。

○没落士族＝明治維新後に地位や財産を失った、もと武士階級の人々。
○中尉＝軍隊の階級の一つ。
○不協和音＝不安定な感じを与える和音。
○シューマン、メンデルスゾーン＝ともにドイツの作曲家。

(一) ①これがさしている内容として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　腕を使わずに視線と表情だけでオーケストラの指揮をすること
イ　オーケストラが演奏している途中で指揮をやめてしまうこと
ウ　指揮台の上に寝転がった姿勢でオーケストラを指揮すること
エ　オーケストラの指揮をしながら聴衆に向かって問いかけること

(二) 〔A〕から〔C〕にそれぞれあてはまることばの組み合わせとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　A しかし　B しかも　C たとえば
イ　A ところで　B つまり　C または
ウ　A しかし　B つまり　C たとえば
エ　A ところで　B しかも　C または

(三) 筆者は第三段落で、指揮者の果たす重要な役割の一つについて述べている。それを要約して、六十字以上七十字以下で書きなさい。ただし、「再現」、「メッセージ」という二つのことばを使って、「指揮者の役割は、……」という書き出しで書くこと。二つのことばはどのような順序で使ってもよろしい。

(注意)・句読点も一字に数えて、一字分のマスを使うこと。
・文は、一文でも、二文以上でもよい。

指揮者の役割は、

(四) ②「解決しない」音で終わるとあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　最後に不協和音が繰り返されることで緊張が緩んで終わること
イ　最後に協和音が力強く響き渡ることで緊張を保ったまま終わること
ウ　最後に不協和音から協和音に移行することで緊張が解けて終わること
エ　最後に不協和音が鳴ることで緊張が解けないまま終わること

(五) ③気候や風土を肌で感じることも試みるとあるが、筆者がこのようにする理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 曲が生まれた土地の気候や風土は、曲の音に大きな影響を与えており、その関わりを体感することが曲の理解につながるから。
イ 曲が生まれた土地の気候や風土は、楽譜を通してオーケストラの演奏者にも伝わり、曲を深く理解した演奏につながるから。
ウ 曲が生まれた土地の気候や風土に身を置くことは、当時の人々の生活だけでなく、作曲家の歴史観を理解することにつながるから。
エ 曲が生まれた土地の気候や風土に身を置くことは、四季折々の色彩に加え、作曲家の自然観を理解することにつながるから。

(六) 次のアからオまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることと一致するものを一つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア オーケストラは、指揮者が指揮棒を振らなくても演奏を続けることができるため、指揮者を不要な存在であるとみなしている。
イ 日本人指揮者は、音符という共通言語で書かれた楽譜を用いて、外国のオーケストラに自分のイメージする音楽を伝えている。
ウ ヨーロッパの作曲家は、滞在した土地での人々の暮らしや歴史的な出来事を題材として、多くの交響曲やオペラを書いている。
エ オーケストラの指揮者は、自分では音を出さずに楽譜を介して演奏者とコミュニケーションを図り、演奏をつくり上げている。
オ ヨーロッパの噴水は、陽光にきらめく姿とリズミカルな音によって水の美しさを表現しており、音楽と共通している点がある。

【愛知県】

二

次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1 いなかに百一歳の叔母がいる。いなかは奥会津である。若い日には山羊を飼って乳などを搾っていたので山羊小母と呼ばれている。山羊小母の家に行ったことは二、三度しかないが説明するとなるとけっこうたいへんである。一見、わらぶき屋根のふつうの農家だが、入口を入ると土間があって、その土間を只見川の支流から引き入れた水が溝川をなして流れている。台所の流しから流れ出る米のとぎ汁をはじめ、米粒、野菜の切りくずなどはこの溝川を流れて庭の池に注ぎ込む。池には鯉がいて、これをえさにしている。

2 土間から上がった板敷きには囲炉裏が切ってあり、冬場は薪がぼんぼんたかれ、戦前までは小作の人たちが暖を取っていたという。板敷きにつづく少し高い板の間にはぶ厚いわらござが敷かれていて、大きな四角い火鉢が置かれ、太い炭がまっかにおこされ鉄瓶の湯が煮えたぎっていた。そのまた奥に一段高い座敷があり、そこが仏壇のある当主の居間であった。当主は仏壇を背にして座り、ここにも大きな火鉢がある。隠居の老人は口少なに控え目の姿でこの部屋に座っていた。土間からの上がり框には腰かけて休息の湯を飲む忙しい日の手伝い人もいたり、囲炉裏のまわりの人の中にはすぐ立てるように片ひざを立てて座っている若い者もあったという。農業が盛んだったころの一風景が、段差のある家の構造自体の中に残っているのだ。〈1〉

3 戦後六十年以上たって農村はまるで変わったが、家だけは今も残っていて、山羊小母はこの家に一人で住んでいた。夫は早くなくなり、息子たちも都会に流出し、長男も仕事が忙しく別居していた。私がこの叔母の家に行ったのはそのころだった。家は戸障子を取りはずして、ほとんどがらんどうの空間の中に平然として、小さくちんまりと座っている。「さびしくないの」ときいてみると、何とも①ユニークな答えが返ってきた。「なあんもさびしかないよ。この家の中にはいっぱいご先祖さまがいて、毎日守っていてくださるんだ。お仏壇にお経は上げないけれど、その日にあったことはみんな話しているよ」というわけである。家の中のほの暗い隅々にはたくさんの祖霊が住んでいて、いまやけっこう大家族なのだという。それはどこか怖いような夜に思えるが、長く生きてたくさんの人の死を看取ったり、一生という命運を見とどけてきた山羊小母にとっては、温い思い出の影がその辺いっぱいに漂っているようなもので、

かえって安らかなのである。〈2〉

4 私のような都会育ちのものは、どうかすると人間がもっている時間というものをつい忘れて、えたいのしれない時間に追いまわされてあせっているのだが、②山羊小母の意識にある人間の時間はもっと長く、前代、前々代へとさかのぼる広がりがあって、そしてその時間を受け継いでいる今の時間なのだ。〈3〉築百八十年の家に住んでいると、しぜんにそうなるのだろうか。村の古いなじみの家の一軒一軒にある時間、それは川の流れのようにあっさりしたものではなく、そこに生きた人間の顔や、姿や、生きた物語とともに伝えられてきたものである。破滅に瀕（ひん）した時間もあれば、興隆の活力を見せた時間もある。〈4〉

5 冬は雪が家屋の一階部分を埋め尽くした。今は雪もそんなには降らなくなり、道にも融雪器がついて交通も便利になった。それでも一冬に一度ぐらいは大雪が降り、車が通らなくなることがある。かつてこの村の春は、等身大の地蔵さまの首が雪の上に現れるころからだった。長靴でぶすっぶすっとひざまで沈む雪の庭を歩いていると、山羊小母はその傍（かたわ）らを雪下駄（げた）を履いてすいすいと歩いてゆく。ふしぎな、妖（あや）しい歩行術である。そういえば、ある夏のこと、蛍の青いしずくをひょいと手にすくい取り、何匹も意のままに捕まえてみせてくれたが、いえば、どこか山姥（やまんば）のような気配があった。こういう「ばっぱ」とか「おばば」と呼ばれているお年寄りがどの家にもいて、長い女の時間を紡（つむ）いでいたのだ。

6 もう一軒、本家と呼ばれる家にも年齢不詳のきれいなおばばがいて、午後には必ず着物を替えるというほどおしゃれなおばばだった。何でも越後（えちご）から六十六里越えをしてもらわれてきた美貌（びぼう）の嫁だったという。物腰優美で色襟を指でもてあそびながら、絶えまなく降る雪をほうと眺めていた。越後の空を恋うというのでもなく、実子をもたなかったさびしさをいうのでもなく、ただただ、雪の降る空こそがふるさとだというように、あいまいなほほえみを漂わせて雪を見ている。しかし、決してぼけているのではない。しゃもじをいまだに嫁に渡さないとささやく声をどこかで聞いた。命を継ぎ、命を継ぐ、そして列伝のように語り伝えられる長い時間の中に存在するからこそ安らかな人間の時間なのだということを、私は長く忘れていた。

7 長男でもなく二男でもない私の父は、こんな村の時間からこぼれ落ちて、都市の一隅に一人一人がもつ一生という小さな時間を抱いて終わった。私も都市に生まれ、都市に育って、そういう時間をもっているだけだが、折ふしにこの山羊小母たちがもっている③安らかな生の時間のことが思われる。それはもう、昔語りの域に入りそうな伝説的時間になってしまったのであろうか。

（馬場あき子「歌よみの眼」より）

（注）○1～7は段落符号である。
○奥会津＝福島県の西南部。
○上がり框＝家の上がり口の床の端を隠すために付ける横木。
○祖霊＝先祖の霊。
○山姥＝人里離れた山奥に住むという女の怪物。鬼女。
○越後＝旧国名。今の新潟県の大部分。
○列伝＝人々の伝記をつらね記した書。
○折ふしに＝ときおり。ときどき。

Step 2

㈠ ①ユニークな答えとあるが、どのような点がユニークなのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　がらんとした家での一人暮らしは怖いはずだが、かえって静かで安らかだと感じている点
イ　実際は一人で暮らしているのに、多くの祖先を一緒に暮らす家族のようにとらえている点
ウ　祖先に見守られて暮らしているのに、仏壇にお経を上げることはないと言い放っている点
エ　築百八十年のいなか家は一人で住むには広すぎるが、全くさびしくないと強がっている点

Step 2

(二) ②山羊小母の意識にある人間の時間と対照的な意味で使われている本文中のことばを、次のアからエまでの中から一つ選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　村の古いなじみの家の一軒一軒にある時間
イ　列伝のように語り伝えられる長い時間
ウ　都市の一隅に一人一人がもつ一生という小さな時間
エ　昔語りの域に入りそうな伝説的時間

Step 3

(三) ③安らかな生の時間のことが思われるとあるが、このことばに込められた筆者の思いに最も近いものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　遠方から嫁いできた山羊小母たちが、高齢になっても由緒（ゆいしょ）ある家の主婦の座をしっかりと守り、村人たちの一生を見とどけながら暮らしていることに深い感動を覚えている。
イ　山羊小母たちが心穏やかに暮らせるのは、祖先の人生を語り継いできた長い時間の中で生きているからであり、そうした時間が失われつつあることにさびしさを感じている。
ウ　自然や伝統を守りながら静かに生きてきた老女たちの長い時間こそ語り継がれるべきであるが、若者は残らず都会へ出てしまい、伝承する人がいなくなることを恐れている。
エ　祖先の物語を長く守ってきた老女たちの時間は、社会が大きく変わっても語り継がれていくが、自分が生きた時間は忘れ去られてしまうような気がしてあせりを覚えている。

Step 3

㈣ 次の文は、本文中のどの段落について述べたものか。第一段落から第七段落までの中から選んで、その段落符号を書きなさい。

効果的な擬態語で人物の動きを描写し、その人物がかもし出す雰囲気や魅力を巧みに表現している。

Step 3

㈤ 次の一文が本文から抜いてある。この一文が入る最も適当な箇所を、あとのアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

そんな物語や逸話を伝えるのが老人たちの役割だった。

ア 本文中の〈1〉　イ 本文中の〈2〉　ウ 本文中の〈3〉　エ 本文中の〈4〉

Step 3

㈥ 次のアからエまでの中から、その内容がこの文章に書かれていることに最も近いものを選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア 奥会津にある段差の多い家は、不便さを感じることはあるものの、農業が盛んだったころの村の生活をよく伝えている。
イ 雪深い農村の暮らしには、今もゆったりとした時間が流れているが、都会の若者たちには想像もできない豊かさがある。
ウ 叔母の暮らしは、都会育ちの人間が忘れてしまいがちな、人が本来もっている時間というものを思い出させてくれる。
エ 叔母が生きてきた時間は、もはや伝説的な物語になっており、次の世代へ受け継ぐことができなくなってしまっている。

【愛知県】

〈*Note*〉

第十二講　随筆の読解③

Step 1

一

解答

(一)イ　(二)ウ　(三)(指揮者の役割は、)楽譜に記された音楽を生き生きと再現するために、想像を巡らせ、作曲家がその音楽に込めたメッセージを探り当てることである。(67字)(同意可)　(四)エ　(五)ア　(六)エ

解説

(一)レナード・バーンスタインが、演奏が始まってまもなく「指揮することをやめた」ことをさしている。筆者は「指揮台の上に寝転がって」という形で、バーンスタインのまねをしたことをおさえる。

(二)A、指揮者のイメージが「ステージで…指揮棒を振っている姿」であることに対して、仕事のほとんどが「指揮台に立つ以前にある」というように、前の部分とは異なる内容を述べている。B、前文までの内容を受け、言い換える形で、「音楽」についてわかりやすくまとめている。C、「蝶々夫人」を例に挙げている。

(三)建築にたとえて説明したあとで、指揮者は、「楽譜という…生き生きと再現しようと、全身全霊で想像を巡らせ」、さらに「作曲家はその音の風景に何を求めたのか…混沌を表そうとしたのか」などのメッセージを「探り当てていく」と述べていることをおさえてまとめる。

(四)「普通のオペラ」では、「不協和音が協和音になるなど緊張が解ける音に移行」して終わることと対比させて、「蝶々夫人」の終わり方を考える。

(五)「多くの作曲家を生んだヨーロッパに暮らして感じるのは…冬の暗さ」であり、「どんよりした寒空の下で…待ちわびる生活」をして、「身をもって」シューマンの曲への理解が深まったことに着目する。

㈥オーケストラの指揮者について、「楽譜は演奏者とのコミュニケーションを図る最大の手段となる」「指揮者はオーケストラの中で唯一、音を鳴らさない音楽家だ」と述べている。

Step 2・3

二

解答

㈠イ　㈡ウ　㈢イ　㈣5　㈤エ　㈥ウ

解説

㈠山羊小母が「家の中のほの暗い隅々には…けっこう大家族なのだ」と感じているところを、「ユニーク」だとしている。

㈡「私のような都会育ちのもの」がもっている「えたいのしれない時間」が対照的な時間となる。最終段落で、「私の父は、こんな村の時間からこぼれ落ちて…小さな時間を抱いて終わった」とくわしく表現している。

㈢「命を継ぎ、命を継ぐ、そして列伝のように語り伝えられる長い時間の中に存在するからこそ安らかな人間の時間」となることをおさえる。「安らかな生の時間」について、「昔語りの域に入りそうな伝説的時間になってしまったのであろうか」と述べている部分から、そうであってはほしくない、という筆者の思いを読み取る。

㈣雪の庭を「ぶすっぶすっと」歩く筆者に対して、「すいすいと」歩く山羊小母の歩き方を「ふしぎな、妖しい歩行術」と表現したり、蛍を「ひょいと」すくい取る様子を「どこか山姥のような気配」があると表現したりしている。

㈤挿入文の「そんな物語や逸話」が、「そこに生きた人間の顔や、姿や、生きた物語」「破滅に瀕した時間」「興隆の活力を見せた時間」をさしていることをとらえる。

㈥「私のような都会育ちのものは…人間がもっている時間というものをつい忘れて」いることや、筆者が「折ふしに…安らかな生の時間のこと」を思っていることが述べられている。